

令和 8 年度 第 1 回下呂市総合教育会議 議事録

1. 開催日 令和 8 年 8 月 28 日（金） 開会 13 時 55 分 閉会 15 時 10 分

2. 開催場所 星雲会館 2 階 西風の間

3. 出席者

(1) 構成員	市 長	山内 登
	副市長	田口 広宣
	教育長	中村 好一
	教育委員	三木 朋哉
	教育委員	河尻 明子
	教育委員	細江 洋一郎
	教育委員	竹田 小織
	教育委員	無笹 ゆかり

(2) 市職員 【教育委員会事務局】

事務局長	二村 卓良
教育総務課長	細江 実
学校教育課長	武田 由香里

【総務部局】

危機管理課長	中川 雅樹
危機管理課係長	曾我 晶子

【振興事務所】

統括振興事務所長	小林 哲
----------	------

【所管部局】

総合政策部長	小澤 和博
総合政策課長	澤 佳孝
総合政策課担当	加藤 康太

4. 傍聴人 0 人

5. 会議要旨 別紙のとおり

開 会

○澤総合政策課長

それでは、令和 8 年度第 1 回下呂市総合教育会議を開催させていただきます。総合政策課の澤と申します。本日、司会進行を務めさせていただきます。どうぞよろしくお願いいたします。手元の次第に沿って進めてまいります。よろしくお願いいたします。

最初に、この会議の後、引き続き定例の教育委員会を行います。それまでどうぞよろしくお願いいたします。なお、本日、市長は 15 時まで出席していただけると聞いておりますので、ご了承ください。また、本日の出席者のご紹介に関しては、お配りしている名簿にて紹介とさせていただきますので、その点もご了承ください。

それでは、初めに今回の議題ですが、「下呂市子ども防災計画の策定について（～子どもが自らの命を守り、家族と地域を巻き込む防災教育の推進～）」という議題について、協議いた

だきますので、よろしくお願いいたします。

また、本会議は公開が原則となっておりまして、事務局において本会の議事録を作成し、後日ホームページ上に公開することになりますので、その点もご理解いただければと思います。それでは、まず初めに市長からご挨拶をお願いいたします。

1. 市長挨拶

○山内市長

皆さん、こんにちは。第1回ということで、総合教育会議を開催させていただきました。本当にお忙しい中お集まりいただきましてありがとうございます。

ご案内の通り、教育委員会と我々行政の立場というのは対等の立場ということで、お互いに干渉することはありませんし、皆さん方と本当に対等な場で議論をする。緊急時や危機対応、防災の関係については、我々行政から皆様方にご提案をさせていただいて、色々と共有していただくという立場です。

今回、防災ということにテーマを絞って、防災計画の中で子どもが果たす役割、どうやって自分の命を守るのか、また社会に対して子どもとしての立場としてどのような対応・貢献ができるのかということも含めて、我々の方から皆様方に色々な形で問いかけをさせていただきますので、今日は忌憚のないご意見を賜ればと思っております。

水害や豪雨の方は、下呂市も経験をしておるわけですが、熊本地震のように、南海トラフ、そしてまた活断層があるこの下呂市として、地震の対応というのはまだほとんど経験がなく対応もどのようにしていくかということについて、もちろんマニュアルはあるのですが、実体験としての実感がない。そんな中、今回は夏休みの中での災害でしたが（熊本は）、そういう色々なケースが出てくると思いますので、そういうことを想定しながら、皆様方から色々なご意見を賜ればと思っております。

下呂市として、学校関係で防災の関係をこれから若干手がけていくのが、今回も夏場の暑い時の災害というのが非常に大きな話題となっております。下呂市としても体育館、小中学校の体育館は指定避難所に全部指定されております。災害が発生した時は全て避難所としての機能を果たす役割を持っておりますので、我々としても、この暑い地球温暖化の中で体育館の空調設備を全て導入していこうという計画を持っております。今年度、そして来年度以降、計画をしながら順次、空調を入れていくというようなことも含めて、教育施設と防災関係のことも取り組んでまいりますので、皆様のご意見も賜ればと思っております。どうぞよろしくお願いいたします。

○澤総合政策課長

ありがとうございました。続きまして教育長にご挨拶をお願いいたします。

2. 教育長挨拶

○中村教育長

皆さん、こんにちは。総合教育会議というのは、先ほど市長が話されたように対等な立場ということがありますが、やはり下呂市の教育を知っていただくということがまず大事ですので、そのことにつきましては、今回、働き方改革については必ず報告しなさいという義務付けがありますので、報告させていただきます。この辺については教育委員会でお話をしていますが、非常に学校の先生方の働き方については超過勤務がなくなってきたということで、非常にいい方向に行っているのではないかなと思いますが、目標を決めておりますので、またお話を

させていただきます。

もう1つは、やはり教育委員会だけではなくて、本当に下呂市と一緒に教育の方針、それぞれ緊急なもの、あるいは重大なものということで話をしていく。今回は防災ということになりますが、実は姉妹都市である宝達志水町が昨日、非常に大きな災害にあったということで、お見舞いメールをさせていただいた。メールでお話をすると、宝達志水町は9月1日からということで学校が、夏休み中で子どもたちが家にいる状況だということで、今やっていることは安否確認ということで、まず人的被害がないので大丈夫だと思うがということでした。もう1つ、今孤立しているところに入っているということで、そこにも児童生徒がいるということですね。

今年初めて宝達志水町へ小学生が交流に行きました。テレビであの姿を見ると、やっぱり心配する子がいて「大丈夫ですか」という声があります。小坂中学校の生徒は交流を2年間連続でやっています。そんな中でやっぱり同じようなことを言う子がいるということで連絡したのですが、「今のところ大丈夫ですよ。」というお返事でした。

本当に人ごとではないなと思いますので、そんな中で子どもたちも心配するような状況を作っている。子どもたちの状況を言うと、さらに一緒になってやることができるのではないかな。そんなところを、色々なところの視点から見ていただいて、今日の防災で子どもたちをどう一緒にやれるかということを考えていただければありがたいかなと思います。よろしくお願いいたします。

○澤総合政策課長

ありがとうございました。

それでは、下呂市立学校の教育職員に関する業務量管理・健康確保措置実施計画について、学校教育課長お願いします。

3. 下呂市立学校の教育職員に関する業務量管理・健康確保措置実施計画について

○武田学校教育課長

はい。皆様のお手元に資料を配らせていただきましたので、この資料に沿ってお話をさせていただきます。ただいまより、令和8年4月施行の下呂市立学校の教育職員に関する業務量管理・健康確保措置実施計画につきまして、教育委員会よりご説明申し上げます。私は学校教育課課長の武田です。よろしくお願いいたします。

本計画は、給特法第8条に基づき下呂市内の全小中学校における教職員の適切な業務量管理と健康確保の取り組みを定めるものでございます。

まず、本計画の趣旨と下呂市の全体施策とのつながりについてお話いたします。下呂市第三次総合計画では、「未来につなぐふるさとづくり」を理念とし、市民一人一人のウェルビーイング、つまり幸福度の追求を最優先事項として掲げております。また、本市の教育大綱においても、ふるさとを誇り未来に向かってたくましく生き抜く子どもたちの育成を目指しております。こうした教育の実現にあたり、教育現場の最前線で子どもたちと向き合う教職員自身が、心身ともに健康であり、専門性と情熱をいかに発揮できる環境を整えることが全ての基盤となります。教職員の働きやすさと働きがいと両立させることが、ひいては下呂市の子どもたちへ提供する教育の質の向上に直結するという考えのもと、本計画を策定しております。次に、令和6年度における本市教職員の実態と成果及び課題でございます。この計画は昨年度の令和7年に準備策定したため、計画の基準となったのは令和6年度の結果となっております。

本市ではこれまでも改革を進めており、特に令和5年度より県内で初めて実現いたしました学校徴収金の完全公会計化により、教員1人当たり年間約30時間の業務削減効果を生み出しております。また、部活動の地域展開も定着し、過労死ラインと呼ばれる月80時間以上の時間外勤務を行う職員は年間を通して極めて少数にとどまり、100時間以上は年間0%となっております。さらに夏季休業中の8月は45時間以上の職員割合が0%となり、長期休業中の休息確保は良好な状態です。

一方で、明確な課題もございます。新学期の開始や学校行事が重なる4月、5月、10月の特定繁忙期におきましては、約半数の教職員が月45時間を超えて在校している実態がございます。この特定時期への業務集中をいかに平準化・効率化し、指導の質を高めるための時間的余裕を生み出すかが本計画の最大の目標となります。

これらを踏まえ、令和8年度に達成を目指す数値目標を設定いたしました。時間外在校等時間に関しましては、第1に月間の時間外在校時間が45時間以下の教職員の割合を80%以上とすること。第2に、年間の月平均時間外在校時間を35時間程度とすることを目指します。また、健康面・働きがいに関する目標として、負担の大きい4月、5月、10月に全学校でストレスチェックを実施し、仕事による負担度が高い職員を出さないよう環境整備を行います。これらの進捗につきましては、毎月のコンプライアンスチェックやアンケート等を通じてリアルタイムに把握し、迅速な対策を講じてまいります。

ちなみに、令和7年度についてです。時間外勤務時間の平均は小学校30時間8分、中学校は33時間34分と、どちらも35時間を切っております。しかし、月45時間以下の教職員の割合については80%以上という目標に対して76.8%であり、まだ達成はしていません。ストレスチェックについては実施いたしましたが、学校全体、下呂市全体としての分析までは行っておりません。今年度から繁忙期である4月、5月、10月のストレスチェックを必ず行うこととし、実態を迅速に把握し対応をしてまいります。

次に、具体的な取り組みの第1の柱です。国が示す業務の3分類に沿った業務内容の根本的な見直しです。

1つ目、学校以外が担う業務として、登下校の見守り等はPTAやスクールサポーター等と連携を密にし、地域全体で子どもたちの安全を守る体制を推進します。また、公会計化と行政アプリ「LoGo フォーム」等の活用による現金取扱のゼロ化も維持します。

2つ目、教師以外が参画すべき業務として、連絡アプリ「すぐる」等によるペーパーレス化や、令和8年度より新たに設置した共同学校事務室による学校事務体制の集約強化、並びに部活動の地域展開のさらなる推進を図ります。

3つ目、教師の業務であるが負担軽減を図る業務として、スクールサポートスタッフを全小中学校に配置し、デジタル自動採点等の技術を導入。さらにはスクールカウンセラーや専門家チームとの組織的連携を強化してまいります。

第2の柱が、学校運営や教育課程そのものの見直しです。各学校の年間授業時数について、標準時数を大幅に超えるような過剰な設定がないか年度当初に点検・適正化を行います。また、形骸化した行事や清掃時間の頻度を見直し、放課後活動も勤務時間内で完了できるよう日課等の工夫を推進いたします。さらに、下呂市独自の重要な取り組みとして、全学校に学業支援員を配置しております。これにより、児童生徒への個別最適な指導を手厚く補佐し、教員の授業準備負担の軽減を図りつつ、多職種で子どもを支えるチーム学校を実現いたします。

第3の柱は、教職員の健康管理と福祉の確保でございます。時間外在校時間が月80時間を超えた職員に対しては、医師による面接指導を確実に実施いたします。また、ストレスチェック実施率100%を徹底し、その集団分析結果を現場の職場環境改善に直結させます。合わせて、年次有給休暇の連続取得促進や、夏季5日、冬季1日の計6日間の学校閉庁日を確実に設定いたします。閉庁期間中の緊急連絡先は、市役所及び学校教育課で一括対応するよう体制整理し、

教職員が安心してしっかりと休息を取れる環境を確保いたします。

教職員が心身ともに健康で情熱と誇りを持って子どもと向き合える環境を作ることこそが、下呂市の未来を担う子どもたちの豊かな学びとウェルビーイングに直結するものと確信しております。以上で説明を終わります。

なお、今年度の4月から施行するために、昨年度中に定例教育委員会において皆様に説明を終えております。今年度の結果や検証につきましては、来年度の総合教育会議でご報告させていただきます。以上で説明を終わります。ありがとうございました。

○澤総合政策課長

ありがとうございました。それでは早速ですが、議題に入らせていただきます。まずは事務局から資料の説明をさせていただいて、その後に意見やディスカッションする流れで行わせていただきます。

危機管理課より「下呂市こども防災計画」の策定について、こどもが自分の命を守り、家族と地域を巻き込む防災教育の推進について説明をさせていただきます。

では、危機管理課曾我係長、説明をお願いします。

資料に関しては、お手元の『げろのこどもみんなでまもるみんなでいきる』という資料です。あと、お手元に論点シートということで、メモ等に使っていただければと思います。

4. 議 題 【下呂市こども防災計画】の策定について（危機管理課）～こどもが自分の命を守り、家族と地域を巻き込む防災教育の推進～

（1）事務局説明

○危機管理課 曾我係長

本日、下呂市危機管理課の曾我より、防災に関するご提案をさせていただきます。着席して説明をさせていただきますので、よろしくお願いいたします。

皆様のお手元にはこちらの資料があると思います。こちらに沿ってご説明をさせていただきたいと思いますので、よろしくお願いいたします。

まず、この「下呂市こども防災計画」というものを、危機管理課から策定についてご提案をさせていただきました。下呂市では豊かな自然がある一方、土砂災害や水害といったリアルなリスクが隣り合わせな市町村です。これまでは、防災に学校の避難訓練であったり、安全管理の枠組みで、教育の方では学校の先生方に大変なご尽力をいただきました。これからは、下呂市を考えた時に、防災は単なる訓練にとどまりません。子どもたちが、少子化や人口減少に伴う地域の担い手不足に直面している当市におきましては、大変重要な人材である、防災についても大変重要な項目であるということで、今回「下呂市こども防災計画」の策定をご提案させていただきました。

こども防災計画の策定の前に、まずこの計画は、子どもたちがこれまでは学校でも地域でも「守られる存在」ということで大人たちが色々なことから守ろうと意識して取り組んできたものを、下呂市こども防災計画に取り組むことによって、子どもたち自身が「自分たちの命は自分で守り、そして家族と地域を動かす存在である」ということを学びの中で取り組んでいっていただきたいという思いが根幹にあります。

子どもは決して災害を怖がるためにこれまで防災を学んできたものではありません。自分でリスクに気づいて、自分で判断して、そして動いて、その学びを地域や家庭に伝えることで、大人たちの防災意識を呼び起こすための「地域共助の結び目」となる大切な存在です。これからは、単なる「守られる存在」から「自立した防災の担い手」への成長を願うために、今回『下

『呂市こども防災計画』というものをご提案させていただきました。

そして、策定のご提案をさせていただく際に、教育委員会の方にご説明をさせていただいたのは、決して新しいことに取り組んで負担をかけるものでもありませんし、学校に依存するような制度を策定するつもりは全くありません、ということです。教育委員会の方では、今行っている防災である訓練であったり、総合教育をもっと意識づけて、価値を見出して公にしていこうということを目的にしているということでお話をさせていただきました。それに下呂市長部局の方の危機管理課がタイアップをして、さらに総合政策課が調整係に入りながら、消防署であったり福祉部であったり、こども家庭課であったり、色々な部署が横断的に関わって作成していくものと説明させていただいておりますので、ご理解をいただきたいと思います。ゼロから始めるものではなく、既存の実績をとにかく体系化をして、それに価値をつけて公にするというのがまず大事なシステムとなっています。

こちらが学校へお願いする実際の実務です。学校としては、既存の時間の活用をお願いしたいということで、朝の学習の時間に数分間ではありますけれど、デジタルアンケートなどで子どもたちが答えやすいような防災アンケートをしていったり、こども防災会議を開かせていただいた際に、代表の児童生徒の参加や派遣にご協力いただくなど、負担にならないような仕組みで、こども防災計画を策定させていただくというお話をさせていただいております。

それでは実際に「下呂市こども防災計画」とはどういうものなのかということで、先ほどお話をさせていただきましたけれど、大枠は子どもを今までは守ろう守ろうとしていきましたけれど、これからは、子ども自身が自分の命を自分で守ることから家庭へ波及していき、それが地域へと向かっていく中で、15年後に子どもたちが大きくなった時に実際に防災の担い手になる可能性が高いということで、過疎化が進む下呂市にとっても大きな存在であるという位置づけができたらと思っております。

そして、こども防災計画の中では、横断的に、子どもたちの年齢に応じたロードマップということで、発達段階に応じた防災を取り組めるような仕掛けをしていきたいと思っております。低学年に向けた防災。高校生としてはどう動くかということで、益田清風高校の方にもお声掛けをさせていただくような形で、全体をまとめる役として入っていただいたり、あとは今まで通り学校へは危機管理課から防災教育に伺うこともありますし、逆に学校が地域の皆さんと交流をいただいて、子どもから大人に防災を説明するような機会も作っていききたいと思っております。そのようなイベントも含めながらやっていく中で、子どもたちが大人に押し付けられた内容ではなく、自分たちが防災で本当に学びたいことを考えるきっかけづくりとして仕掛けていきたいというところがあります。

小さい子から高校生までが、一体本当にどんなことに防災に興味があるのか、どんなことを不安に思っているのか、防災で論点として取り組みたいことを子どもの中から引き出し、実際に学びたいことをアンケートを取ってみたりですね、ここはDXを活用してスマートに行っていきたいと思っております。

そして、こども防災会議というものを開かさせていただいて、各学校の代表者による話し合いであったり、実際に避難所開設をそこでやってみて、そのやったことを今度は学校へ持ち帰って、広げていただくようなお手伝いを今度は教育委員会さんにしていただきたいなということで、横断的な協力をいただくような形になります。さらには学校で学んだ、子どもたちが家庭に持ち帰るということで、家庭で危険箇所を確認したり備蓄品を確認したり、そういう声かけ、些細なきっかけですけども、それによって家族の自助・共助が高まるというところを基本的に思っています。

もし、こども防災計画を策定していいよということでご理解いただけたら、策定スケジュールとしましては、まずは今あるものを整理して、現状を体系化します。そして、子どもたちのヒアリングを行ったり、学校現場のヒアリングを行う。または外部の有識者（教授など）をお

呼びするような形で、外部からの視点で見ていただくようなところを設けたいと思っています。

地域連携につきましては、これまでも行っておりますが、今年の総合防災訓練には小中学校にご協力をいただいて、いつも参加をいただいておりますけれども、より訓練に参加いただけるような体制をとっていただいて、お声がけを保護者の方にさせていただいております。また地域の方では、危機管理課から防災の訓練の説明に伺った際には、「子どもたちをぜひ役割を持った計画を立ててください」ということで、すでにお願いをしまして、今回、21日までに、防災計画、訓練計画が出てきておりますけれども、その中でも、子どもに役割を持たせた計画をたくさん、いろんな自治会が出してくださっておりますので、そういった形で地域の人たちにも、子どもと一緒に防災訓練、防災に関する知識を波及させられたらなという取り組みをしていきたいと思っています。

そのステップ1が終わりましたら、今度それを持って代表者が集まった防災会議なんかを開いて、そこでワークショップをやったり、学校への持ち帰りに展開します。

ステップ3ではその気づきを元に、最後、計画を策定して、公にできる「こども防災宣言」（仮ですけども）の発信ができたらということで、こちらで取り組んだことを発表する場をどこかで設けます。

短期ゴールとしては今言った下呂市こども防災計画、こども防災宣言の策定・公表となっておりますけれども、長期的には未来への投資ということで、この計画を通じて15年後下呂市の地域共助と豊かなつながりを支える、たくましい主役となって、こども達が育っていくことを目標にしております。

このような形で危機管理課からは防災について、こどもと下呂市と教育委員会とが一緒になって計画に向かっていく中で、お互いに防災について学び、お互いに将来的に向かってやっていけたらなということでご説明をさせていただきました。こちらでご提案の方は終わりになります。

（２）ディスカッション

○澤総合政策課長

ありがとうございました。それでは、ご意見をいただきたいと思います。委員の方から順番にお願いしたいと思います。

それでは最初に三木委員の方からご意見をいただきたいと思います。

○三木委員

まず、こどもの防災計画ということで、策定される意図についてご説明を伺ったと思うんですけども、その中で一点、最初の教員の業務量管理と関連して「学校には負担をかけない」とのことですけれど、その中で、先ほどの資料ですと、授業時数の適正化ということで、現在、授業の時間数が通常よりも少し多目にとってあるとのことでした。これを見直していくということと、防災計画を導入するということとで、少し合致しないところもあるかと思いますが、授業時数を削減してでも、導入・参画していく余裕はどうでしょうか？

○澤総合政策課長

学校教育課長さん、お願いします。

○武田学校教育課長

はい、お答えいたします。

これまでも、防災教育に関わることだったり、命を守る訓練等については、学校の行事や特別活動等で行っておりますので、その時間の中で行っていくことが可能だと思っております。

○三木委員

小坂中でVRを使った授業は、非常に、子どもたちもリアルに感じられたので、ああいう形で無理のないように。そして、小坂も6年前の7月にありました豪雨災害から随分になりますので、ああいうこともより風化させずに、VRだったら身近に感じられたかなと感じました。

そして、子どもに防災に関わってくる、ちょっとずれるかもしれませんが、担い手になっていくということと同時に、先ほどの成長段階でのそれぞれの役割ということはあったのですが、私自身もちょっと懸念するのが、どうしても避難所に避難する、そしてそれがいつ帰れるか、また帰ったとしてもインフラが復旧していない状態で避難所に留まらなくちゃいけない。そういうことを6年前に小坂の長瀬地区であって、確かあの時は体育館が開放されたと思うんですけども、今ほどプライバシーをある程度守れるような段ボールの間仕切りとかもなかなか追いつかない中で、これは個人的な意見かもしれませんが、年配の人は、不謹慎な意見ではなくて、みんながあそこに集まって、急に一緒に過ごすことになったのですが、結果的に1、2日で帰れたから、長いことだったらそうはいかないけれど、年配の人は、みんなで、普段同じところにいる地域の人たちでも、あんな風に過ごせるのなんてなかなか無かったから、楽しかったまでは言わないけど、すごくポジティブな意見として避難の時間を捉えられていて、すごく嬉しいんです。

ただ、それが一方で私の年代でもそうですし、子どもになると、子どもにとって懸念されるのが今、インフラの中に水道とか電気とかそういうものだけじゃなくてインターネットって確実に、入っている中で、私の子どもでも家に帰ったら、スマホだったりゲームだったりYouTubeだったり、そんなのを触って過ごす子どもたちが、避難所でインターネットが使えないという状況の中で、果たして過ごしていけるのか。年配の人たちは遅く不便だけでも生きていける。でも私たちはデジタルネイティブである、子どもたちが、逆に大人を引っ張っていかなくちゃいけない立場になりながらも、デジタルネイティブであるがゆえに、逆に不自由さと窮屈さとストレスを強いられる世代になってきているのではないかなということを感じます。だから、それをどうするかというと、やっぱり最後の論点整理の4番目のところ、5つの力の中に「家族と話す力」だったり「地域と繋がる力」。これは人と関わっていく力ということだと思うのです。電子機器を通してというのが当たり前になる中で、それが遮断されても、なお年の近い人同士だったり、ある程度の期間、決まってるんだったら、避難の。やっていけるけど、そういう風になっていかないうち、いろんな年代の人と、非常時において共に生き抜いて過ごしていける力を、日常つけていかなければならないのかなと思います。それはやっぱり、小さい単位は家庭だと思いますし、そうすると子どもだけの問題じゃなくて、保護者、同居する家族との関係にも関わってくると思います。6年前の避難のことを聞いて、そんなことをちょっと懸念として思ったのと、やっぱり長く生きてこられた方の知恵というのはすごく大きい。だから子どもを主体に置くことと共に、大人が相互的に連携してくるような計画であって、こども防災計画と言いながら、子どもに特化した計画だけではないということだと思います。

あとは、今思いついたのですが、コロナとかインフルエンザの感染防止について、随分大人たちも、以前のように緩くなってきていると思います。ああいう未曾有の経験をしたからこそ、身についた習慣を今一度確かめていくことは容易にできると感じます。すいません、ちょっとバラバラに話しました。

あとは現状の既存の中でできることということ、やっぱり登下校の中で危険な箇所をその都度確認していることは、今すぐできることだと思います。小学生だったら、スクールサポーター

の人たちと、「ここ前に崩れたんだぞ」とか。小坂だったら郷石原という地区が今まだ片側通行ですけども、巨大な石が昨年落ちてきましたが、やはり郷石原という地名自体がやはりそういう落石の多いところから来ていると、私も年配の方から聞きました。そういうような身近な地名から、実はこういう危ないところもあるんだぞということは方言の中で確認できるかなと思います。

最後に、一点、言葉尻になるかもしれませんが、最初にいただいたご案内の中に「家族、地域を巻き込む防災教育の推進」とありました。巻き込むという文言については、当然、参画する、参加するというような意味合いがあって、なおかつ巻き込むという、子どもが主となって動的な非常にダイナミックな表現ではあるんだけど、やはり災害ということと「巻き込む」という表現は、非常にあまり折り合いが良くないというか。どうしても、この文言を使わなければいけないということであればなのですけども、私、個人的には、防災・災害ってことと、「巻き込む」という表現が、どうもしっくりこないように感じました。もし今回の資料から代替できる言葉があるのであれば、変更していただいてもいいのかなという風に個人的に感じました。ちょっと思いつくまま羅列でお話申し上げましたが、以上です。

○澤総合政策課長

ありがとうございます。では、河尻委員、お願いします。

○河尻委員

はい。今いただいた、「げろのこどもみんなでまもるみんなでいきる」この資料なんですけれども、初見なので全部読めてないところもあるので、もしかしたら書いてあることかも分からないですけども、思いましたのが、感想として12ページの「家族を巻き込む持ち帰り型」学習というところがあるのですけれども、確かに今までは、学校の中で子どもを守るというのを、なんとなく親、大人が子どもを守るという印象がすごく自分の中にあったんです。子どもを色んなことから守る、例えば、災害から守るもそうですし、不審者から守るとか、色んなことから子どもを守るというイメージがあったのですけども、それがもしかしたら、一番最新の情報を耳で聞いてくるのは子どもなのかなということも思いました。

大人も忙しい、子どもも忙しいと言われる時代です。なんだけど、もしかしたら、最新の情報を子どもが学校で聞いてきたり、それを家族に知らせる、地域の人に知らせる、また色んなところに発信をしていくということ、ある意味その最適解をもっている。新しい情報がどんどん更新されてくるので、その新しい情報を子どもが最初に聞いてくれば、家族に知らせたり、地域の方に広げていったりというのは、すごく有効なことかなということも思いました。それと、子どもを守るという感覚、もしかしたら子どもに守ってもらう立場になるのかなとも思います。やっぱり大人の感覚の中では、昔はこうだったけど、新しい情報ではこうなっている、変わっている、変わっているものを大人のほうが教えてもらって、それを実行して避難をしたりとか、災害の予防をしたりとか、災害時に備えての備蓄をしたりとか、そういったことも新しい情報を持っている人が、いかにして広めていくかというのがやっぱり重要になっていくのかなということも思いました。

なので、それが今回、子どもにも担い手になってもらって、今の子どもの状態で大人が助けてもらうこともあるでしょうし、子どもが何年後かに成長していった先で、その年代になった時でも、今の私たちが守ってもらうとか、支えてもらうとか、子どもも育っていくし、大人は老いていくし、ということもあるので、そういった意味と、どんどん子どもに新しい情報を伝えて、子ども自身が考えるということもどこかに書いてあります。自分で考えて自分の身を守るということと、子どもが考えて大人と一緒に、家族と一緒に相談をして「じゃあどうしようか」とか、お互いが意見が言い合えるためには、一方的な押し付けではなくて、やっぱり情報

を持っている人と相談し合うのがすごく大切なことかなということも思いました。すごく色々な段階、フェーズで、こういう場合はということで、すごく考えられた計画だなという風に思いました。

ただ、これが色々実行されていって、先ほどの最初の学校の先生の勤務時間のこともあったり。もし災害が起こったのが今回のように、被災者でありながら被災者をお世話する役割も担っている市役所の方とかのテレビのインタビューとかも聞いたのですが、自分の家も被災してすごく壊れたりとか、浸水したりとかしてるのだけど、それでも市役所で地域の方の対応をしたりというお話をきいたのですが、実際、学校の先生も同じように、自分も被災者でありながら学校で子どもたちのお世話をしたり、地域の方との連絡を取り合ったりということも、当然あり得ることだと思うので、そのあたりの先生方の精神面だとか肉体的な負担も考慮していただくと、より先生たちの気持ちというか、ストレスというか、そういったのも少しでも減らせるところがあれば、よりいいのかなと思いました。以上です。

○澤総合政策課長

ありがとうございます。次に細江委員をお願いします。

○細江委員

防災の災害というのは、地震、水害、それから火事、この3つが大きなポイントだと思うのですが、間違っていないか？

○危機管理課 曾我係長

防災教育に行った時は、下呂市で起きている災害をまず最初に学習をしていただくんですけど、もちろん大雨、そして今言われた地震、あと火山災害。御嶽災害をお話をさせていただいております。

○細江委員

ありがとうございます。こうやって考えてみますと、私、人生60数年生きてますので災害にあってます。小学校の6年生の時に王滝地震があったのですよね。その時、かなり下呂も揺れました。私、中原小の6年生だったのですが、古い校舎で木造だったのですよね。で、その2階に居まして、かなり揺れた記憶があります。その時、担任の先生も一緒におったものですから、担任の先生の指示に従って階段を降りていきました。本当に腰が抜けるような思いをして走っていた記憶があります。で、後で聞いた話、竹原地区では墓石がかなり倒れたとか、私の近くでも、大和橋が少し段差ができるように、橋桁というのは地震が起きると落ちますよね橋が浮くのか、それがね、割れ目が入ってこれはすごいなという、小学校6年生の記憶です。

そういうことで言うと、今度は水害。中学校1年生の時の、飛騨川バス転落事故ですね。60年近く前のこの時を思い出すと、下呂中学校の1年生だったと思いますが、水が出たから、川が荒れているからということで、下呂中学校ですぐ帰れと言われたのですが、近くの子はいいのですが、私は中原なものですから、とりあえず下呂駅まで行って下呂駅から列車に乗れと、列車に乗って私は焼石ですので焼石駅まで親たちが迎えに来たと、その時、列車から見る水と洪水がですね、すごいなという記憶が未だにあります。もう60年近く経っても、そういうすごい怖い記憶があります。

火災に関しても、私、消防団に20何年いましたので、実際に火災に立ち合いました。すぐ近くで火災があった時は、2階が燃えているところで対応したことがありますので、経験が豊富なのですが。いざとなった時にどう対応していいかってことは、はっきり言ってマニュアル通りにはいかないと思うのですよ。たまたま、私の場合は先生が居て、下呂中学校の指示があっ

て、指示通り動いたからいいのですが、これ、子どもだけで行けますか？下呂駅まで歩いていけなんて、そんなことできないですよ。ですから、なかなか子どもがどう考えるか、子どもがどう対処するかというのは、かなり難しい問題だと思います。できることは、自分のことは自分でやれと。で、危ないことはするなと。で、先生や周りの指示に従えと。そのくらいじゃないですかね。色々マニュアルを作ったりハザードマップを作ったりすることは、私の地区もずっとやってきましたが、実際それが活用されるかどうかというのは、ちょっと甚だ疑問な部分があります。それよりも、避難場所がどこであるとか、どこを通れば大丈夫だとか、そういう具体的な指示を子どもの頭の中に叩き込んだ方が、より確実に安全じゃないかなという風に思います。

○澤総合政策課長

ありがとうございます。では、無笹委員お願いします。

○無笹委員

まず1つお聞きしたいのが、9月の第1日曜日かな。防災訓練が地域であると思うのですが、私の子どもたちの時もそうだったのですが、中学校とかになると部活の大会とか色々入って、参加する子があの頃は少なかったのですが、今年の今の、これになって、強制的になるべく子どもたちが参加しなさいという形をとられるのでしょうか？

○武田学校教育課長

今年度もですけども、中学校の方では部活を行わないというところで、その日については地域の防災訓練に参加をするということで、保護者の方にも全家庭に「すぐーる」でもお伝えしております。

○無笹委員

ありがとうございます。さっきの資料の中で、私もちょっとしっかり読んでいないところもあるのでダブるかもしれないのですが、今、地域の消防団とか防災士さんとの、学校で学ぶことももちろんですけど、子どもたちとその人たちが一緒に触れ合って、お互いに自分たちの思いを伝えるような、そういう機会を、この先作る予定はあるのでしょうか？

○危機管理課 曾我係長

これまでも、地域コミュニティスクールを通じて、防災士さん、地域の役員さんが会場にお越しいただいて、中学校の生徒が逆に防災のことを発表したりとか、一緒に避難所開設をやるという体験を繰り返しておりますので、これからも継続してやっていただくということと、あとは、こうやってやっぱり地域で知らない方がたくさんみえるので、やっているよということをもっとPRをして価値づけていく、体系化していく。それで他の学校が「うちもやってみたい」であったりとか、もっとこれを真似して地区でやってみたいっていう話もあって、この間、上呂地区のほうで中学生が大人に説明をするという機会を設けていただいて、防災の1時間会議をやってみえましたが、そういうことが増えていくと思います。

○無笹委員

ありがとうございます。あと、ごめんなさい質問ばかりなのですが、例えば朝起きた時の災害と夜起きた時の災害って、たぶん全然違うと思うのですが、その辺のことについても、子どもたちに「こういう場合はこうだよ」っていうことも指導されるのでしょうか？

○危機管理課 曾我係長

先ほど細江さんの方からも一応、もっと実際に即した話を入れた方がいいんじゃないかという話はあったのですが、実は学校のほうに、「ついでに防災」ということで、今、危機管理課の方では、4月から9月までの間、地域を合わせて55箇所以上行かせていただいて、今そのお話を一緒に聞いていただいたメンバーはもう1000人も超えました。

学校としても小中学校で、1学年4回、4時間ぐらい総合学習等で呼んでいただいております学校もありまして、その中で、もちろん朝のパターン、夜のパターン、夏だったら、冬だったら、じゃあ君たちがもし大人がいなかったら、というところでいろんなお題を出して考えるように学習を進めているようなところへ危機管理課が行って、一緒に実際の体験をする。「お皿がなかったらじゃあどうしますか」、「食べ物があるところ知ってますか」とか、備蓄、そして今、避難所のことなんですけど、避難所でトイレを使うのは君たちだけじゃないよと。ただ、君たちはもう掃除ができるんだから、綺麗なトイレを使おうと思えば、掃除からしましょうということで、災害用トイレを組み立てて、掃除をしてトイレを使って片付けるまでを一緒に学習したりとか、そういう具体的な学習を行っておりますので、そういうことも体系化して、いくつぐらいになったらこういうことができますよということで、公開していけたらいいなと思ってます。

○無笹委員

ありがとうございます。最後に、今、いろんなお話を聞かせていただくと、子どもたちよりも私自身の方が知らないことが多いかもしれないと思ったし、子どもたちはもう私から手が離れちゃったんで、夫と2人なので子どもと話すこともないんですけども、でもこれを機に、ちょっと自分も一緒に学ぶ必要があるんだなということを感じました。ありがとうございます。

○澤総合政策課長

ありがとうございます。竹田委員お願いします。

○竹田委員

色々お話を聞いて、最後も難しいなと、すみません。

私は保育士をしているので、毎月、避難訓練をするのですけれど、やっぱり、果たして実際に起きた時にどれぐらいまで対応できるのかなと、本当に突然とか計画を立てずにやってみようってやった時ほど、「あ、これもやっておけばよかった。これがやっぱり足りなかったな」っていうことを思いながら、いつも逆に不安になって「これも、しなきゃ」と、ちょっと頭がいっぱいになる感じなのです。

今こういう、ダンゴムシのポーズ、これも果たしてその状況によっては、全部それが丸なのかバツなのかっていうことも思ってみたりする時に、本当に子どもにとにかく命を守るっていう、そのどれを話していいものか。ちょっと園児に関わる人が多いので、どうしても園児のことを頭に浮かべてしまうのですが、そういうこともなんか訓練の中でいつも考えるのですけど。ちょっとまとまらなくて申し訳ないです。

改めてやっぱり子どもたちに、それをいろんな場面で考えさせるということが本当に必要やなと。こんなことで大人が考えて、例えば近くに保育士だったり、こんな時はどうする、先生だったり、子どもたちに「こんな時はこうするといいね」って一緒に話し合いながらできることが、本当に一番大切だなということを感じながら聞かせていただきました。すみません、以上です。

○澤総合政策課長

ありがとうございました。では、中村教育長お願いします。

○中村教育長

まず、教師の負担ってことはたくさん言われましたが、これについては、色々なところで話をしていますが、早めに色々なことを言っていただくと、それを使うということで、教育という面ですよ。子どもたちには力がつくということもありますので、きっとこのことは子どもたちにとって、とってもいい勉強になるっていうところがあるかもしれない。命を守ることに對しては、ということの勉強ということで考えると、非常に有意義になるものだと思っています。

もっと言えば、実は、防災教育というのはもう色々な場でやっているのです。園児さんも一緒でね、色々な場ってことで、これをやれば何かができるっていうものではないっていうことだけは知ってほしい。例えば、もう教科の中でも入っているのです。例えば、社会で言うと、4年生で「風水害、自然災害から暮らしを守る」っていうところがあるので、もう勉強している。5年生には「自然災害を防ぐ」で、中学校になると「自然災害の防災・減災の取り組み」、歴史にも地球温暖化の防止とかいうようなことで、色々なことを勉強し、教科でも勉強しているし。先ほどから出ているように、市からお願いしてというのは、総合的な学習の中で防災教育を取り入れてやったり、ふるさと教育をやっていますが、それ以外の授業の中で防災教育を取り入れることもあるということです。本当に、簡易ベッドやテントの組み立てから、トイレの設置、非常食を食べる体験、もっと言えば災害図上訓練ですよ。それもやっているということで、色々やっています。

だから、ちょっと言いたいのは、それを1つの勉強の出口ということで、こういうことを考えさせていただくとありがたいのではないかな、なんてことを思います。「試す場」ということで。そして、じゃあ何をするかということ、大きなことを考えてもらおうと本当に困ると思います。やっぱり大人だって、私たち作れと言われてたら難しいと思うのですよね。だから、子どもたちに話し合う中で何を話し合うかと言うと、じゃあ「こういう時やったら何ができるだろう」ぐらいから話をしていき、避難の時、何したらいいだろうということで、例えば、余裕があったら近所の一人暮らしの高齢者の方に声をかけようとか、あるいは避難して避難所が設置されたら僕は何をしたらいいのだろうということを考えたり、そういうことを考えていると、日常では何を備えていかなければいけないのだろう、なんてことも考えることができていると思います。

だから、先ほど言ったように、急に「作ってください」は、えらいですが、これを話し合いながら考えていくということは非常に大事なことやな、ということを思います。そして出来たものを、こんなことがあってはいけないですが、もし何かあった場合にまた振り返って、次の方法を作るというようなことを考えるということになると、学校としても是非取り入れたいことに繋がるのではないかな、ということをちょっと思っております。そういう話し合いってというのは、今、特に中学生は非常に盛んにやっていますし、そういうことを話して色々工夫する力がついてきているのではないかなってことを思っているの、このようなことができ、1つ学校が飛びついてくれるとありがたいかなと、思っております。以上です。

○澤総合政策課長

ありがとうございます。副市長お願いいたします。

○田口副市長

そうですね。今回の熊本地震のニュースの中で、結構そのライフラインで水が水道が止まっ

てしまっていることで、やっぱり水ってとても重いので、小学校高学年位になると、率先して水を運んでいたりとか、やっぱりその、子どもは子どもなりにできることを自分たちでちゃんと考えて、しっかりやってくれているんだなということを非常に感じました。

我々行政にいる人間からすると、基本的に避難所の運営というのは、やっぱり自分たちでやっていただくのが基本であって、決して「お客様」ではないので、被災した人が自分たちで運営するのが当然なのですが、どうしてもやっぱり「我々は被災者なので」ということで、行政とかそういうものに頼ってしまうのですが、やっぱりそうしてしまうと、先ほどの例えば、トイレの話にしても、自分たちは使っただけで、掃除をしてもらうのは行政の人とかそのボランティアに入ってもらってなってしまうと、結局、お年寄りとか、トイレが汚いのでトイレに行かなくていいように水分を取らないようになってしまって体調が悪くなってしまうこともあるので。

やっぱり小さい頃からこういう計画がどこまで活かされるかということよりも、「こうなった時にこういうことがあるよね」ということを想像する力を養うために、こういうものを自分たちで作る、一番大事なことで。我々、上位計画としての下呂市の防災計画があるのですが、それを作り、更新していく上でも、いろんな災害、今回の災害ではこういうことがあったというのを取り入れながら次の災害をこう想像して、じゃあ何ができる、何をしたらいいというものを詰めていくことがあるので。

子どもたち自身がこういうこと自分たちで考えて、自分たちでできるのはその、すごいことでなくてもいいと思うのです。でも、自分たちは、もしやるのだったら、こういうことができるのだとか。例えば、ここ、阿寺断層がありますので、少なくとも家が倒壊しないようにとか、家具が倒れてきて潰されないように、自分の家につかえ棒を付けようとか、寝室には家具を置かないとか、そういうことを子どもたちが、先ほどもお話ありましたけども、学校から聞いてきたものを家庭に持ってきて、親が聞いて、「あ、そうなんだ」と感じるのは、ちょうどゴミのこともそうだと思うんですけど、子どもたちがやっぱり資源回収で持っていくことで、「これはゴミじゃなくて、ちゃんと束ねて持っていけば紙のリサイクルできるよ」って話を家ですると、親は「くちやくちやくとして捨てたものを、あ、捨てちゃいけないな」ってことがあるので、子どもから学ぶということで、家庭にフィードバックするところでは、非常にいきつけになるんじゃないかなということは感じます。

○澤総合政策課長

ありがとうございます。それでは、市長お願いします。

○山内市長

今日はこれ、総合教育会議でこうしてご提案してお話をしてるのだけど、不十分なんだよね、これじゃ。地域にはどうやって話をするの？あとは家庭的なところも含めて、これ、学校が、これを読んでも「学校でやってくれ」っていう言い方になってくるけど、これは絶対にそこはちょっと履き違えちゃいけないので。

学校に負担はかけませんけど学校でお願いしますという、学校はだからこれだけの負担、最小限の原則でこれだけやっていただきたいということはいいのだけど。本来は「生きる力」を学ぶのだから、地域じゃあ何をしようかと、地域コミュニティの中で何を教えるのかということが、これまた別のところでやられるのか。教育大綱にある、学校と地域と家庭という中の、地域は何をするのか。だから、これ学校だけにやらせるのかなっていう。でも学校は「負担がなんとか、できますよ」って言うのだけど、そこはもう一度、もう少し地域はじゃあ何を地域として教えるのか。例えば地域には防災士がいたり、いろんなコミュニティで地域のことをやりますから、そこでもしっかりと教えなきゃいけないし。学校っていうのはちょっと限界

があるのかなっていう気はしますよ、私は。元々、要は動物と一緒に、生き残るために何をすべきかって親が子どもに教えて、そして地域が教えて、学校はそのサポートをしてるだけなので。その辺りを防災計画の中に落とし込むのであれば、地域で何をするかっていうことの方が、どちらかというとメインになってくる。

災害になれば当然、避難所へ行くのは地域の人と行くのであって、その中で、例えば低学年から高学年まで役割が全然違うし、中学生なら今おっしゃったようにもう手伝いができるから、そういうことも含めたこの計画っていう風なら、いいのかなという風に思いますので。今日は総合教育会議ですから、学校としてもこういうことを承知して、学校も常に防災教育をやってみえますものね。そこからさらに地域へどう持っていくかが我々行政の仕事。行政が踏み込んでいく仕事もあるしということだと思いますので、その辺りまた、これから総合的に考えていくことになるのかなと。この内容自体は、全然問題はないと思いますので、よろしくお願いいたします。

○澤総合政策課長

ありがとうございます。皆さんから意見をいただいたのですけども、一点だけ。あの、「巻き込む」という言葉に関しては、避けた方がいいということで、別の言葉を考えようと思ってます。あと今、学校だけでなく地域コミュニティっていう話がありましたので、その辺も今後、進める中で連携していくということも進めていきたいと思います。

皆様、恐れ入ります。進行の途中ではございますが、ここでご案内がでございます。

山内市長におかれましては、この後別の公務が控えておりますため、お時間となりましたので、ここで中座とさせていただきます。

○山内市長

申し訳ございませんが、ここで退席させていただきます。宜しくお願い致します。

○澤総合政策課長

論点シートの中には、こちらの方で考えているもので、2枚ほどでまとめさせていただいてまして、最後の2ページ目に、策定スケジュールの中に（合意形成、現状把握、原案作成、地域連携）みたいなものを1年目でやって、2年目は（実践・対話、フィードバック）、3年目は（計画素案作成、決議、報告）とかそういう形を考えてたり。

6番目のところでは、消防団や自治会、あと益田清風の高校生やジュニアリーダーみたいなところと協働する必要があるとか、そういうのもちょっとペーパーでまとめてますので。ご意見等ございましたらどうぞお願いします。

○竹田委員

学校は、災害があれば早めに授業を再開しなければいけないよね。でも、避難所として役割を担わなきゃいけない時に、子どもたちと、授業をする場と、避難所としての機能、その2つを同時に行うことについて、どんなふうを考えておられるのかな。ごめんなさい、考えてみえたら全然恐縮なのですが。実際に災害が起きた時に、学校の授業と、避難している方々との生活をどう両立させるかというのを、どのように考えてみえますか？

○中村教育長

大きな避難所になってきた時はもうみんな一緒なのだけれど、ある程度時間が経って、まだ体育館に避難者が残った場合などで、やっぱり子どもたちには「学びの保障」は絶対していかねばいけないので、その時にどうしてもこの学校にたくさんの人で教室も使わざるを得な

い時は、違う場所で勉強させますと。

そういう風にしながらも、避難している人たちも大事なので、色々なパターンを考えながら、学びの保障と、そして避難している人の安全と、生活を大事にするということを考えながらやっていくというのが今のやり方です。能登の場合は、少年の自然の家とかに、移動してそこで宿泊させてっていうこともやりましたね。そのような学びのことをやりながら、でもこちらではちゃんと避難させたい。そういうようなことは、もうここだけの話にならないので、県全体で話し合いになってくると思いますが。そういう動きをさせていただきます。

○三木委員

先ほど市長さんも言われたのですが、地域とか大人への周知ということについて、これが学校を基軸として、子どもが学んでいたりする中で、先ほど河尻さんが言われました、その最新の知識とかそういうことを子どもの方がとすれば身につける。しかし、どうしても大人は「子どもだから」っていうような目で見てしまうところがあって、「子どもの言うことだから大人の言うことに従え」っていうようなことになりかねないことがあると思うのです。当然、専門的な知識を持った方が、イニシアチブを取ったりすればいいのですが、言葉はあれですが、船頭が多くなってしまった時に、結局、混乱を招く。子どもの方が正しかったのに大人の経験則だけで、間違った方に導いてしまう。なのでスケジュールにも地域連携とか、ちょっと硬い言葉でありますけど、こういうようなところで、このような視点で子どもを見ていく「主体的に動いていく、考えて動いていく子ども」というものを、子どもではあるけれど1人の人間として認めていくような、周知をしていかないと、せっかく子ども防災と言いながら、やはり子どもも大人も連携していくものなので、「所詮、子どものことでしょ」っていう目線で見られないような、計画・プロジェクトであって欲しい。それを、所詮、子どもでしょって思ってしまう私のような者にも、やっぱりその「尊重が大切なんだ」ってことを伝えられるような周知徹底をしていただけたら、より良いものになるのではないかなと、この計画の目指すものが向上してくれるといいかなという風に感じます。はい。以上です。

○澤総合政策課長

ありがとうございます。他によろしいでしょうか？

本日、頂いた意見に関しては、議事録等で整理させていただきますので、ご承知おきください。

教育長、お言葉をお願いいたします。

○中村教育長

はい。私はやっぱり教育という立場で話をしてみると、子どもたちにもその防災ということで、自らの命を守るとか、人の命を守るということを考えさせることはすごい大事で、話し合うことは非常に大事だということで、こういう防災計画なんかも1つの教育の大きな手立てになると思っています。

ただしやっぱり、市長さんが言ったように、地域、子どもたちが作った計画ではなくて、今度はそこにどう関わるか、それをどう活かしていただけるかは、やっぱりこれはもう教育から一線離して、やっていかないとなかなか難しいことになるだろうなということで、この辺がまた、この子ども防災計画の1つの大きな視点になるのではないかなと思います。その辺また一緒に考えながらやっていただければいいかなと思います。

5. 統 括（副市長）

○澤総合政策課長

ありがとうございます。

副市長、今回の総括をお願いします。

○田口副市長

ありがとうございました。

自分は平成26年から28年まで、防災情報課長ということで、ちょうど御嶽山が噴火した時に担当しましたし、30年の時は逆に、健康福祉部にいましたので、あの上呂の山が崩れてたくさんの方が避難した時に、上呂の公民館の避難所対応ということで、やらせていただいて。当時やっぱり「お風呂に入りたい」とか、いろんな要望を受けて、それから、一旦、家に戻っていろんなものを取りに行きたいとか、いろんな要望があったのですが、まあそういうのを教育長さんが言われたように、非常にその時その時のいろんな判断が必要と思って。ただやっぱり、そういう判断の元になるのは、やはり事前に作ったこういう計画とかで、じゃあこういう時どうしたらいいのかなっていうのを、すごく参考にしましたので。確かに言われたように「これ作ったからじゃあその通りいけるか」って決してそうではないと思いますので、それを作った上で、日頃の生活の中で何が自分でできるのかということは、子どもたち自身が考えてくれると。

消防団もそうなのですが、特に田舎の方って、消防団の数はたくさんいるのですが、昼間やっぱり仕事で外へ出てきてしまっていて、夜はもしかしたら自宅にいて、いろんな火災があって対応できるのですが、そうした時、もしかしたら、本当に子どもたちだけがうちに残ってて、お年寄りと一緒にいう時に、やっぱり子どもたちがすごく頼りになる局面があるのではないかなと思いますので。

今回、良い機会にさせていただいて、防災力を高めるというか、自分の命は自分たちで守るんだよと。で、自分の命が、何事もないければ、人の役に立てるところに繋がっていけばいいかなと思いますので。そのきっかけになる今日がスタートの会議だと思いますので、ぜひよろしく願いいたします。

○澤総合政策課長

ありがとうございました。

本日は大変お忙しい中、お集まりいただきましてありがとうございました。

これを持ちまして、令和8年度第1回下呂市総合教育会議を終了させていただきます。

皆様、お疲れ様でした。ありがとうございました。